

2022 年度 社会学科

小 論 文

〔自己推薦 A O (A)〕 14-02

注 意

1. 監督者の合図があるまで問題冊子は開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙のきめられた箇所に記入してください。

次の文は、中山京子「今、「人種」「民族」を問う意義」(中山京子・東優也・太田満・森茂岳雄編著『「人種」「民族」をどう教えるか―創られた概念の解体をめざして』明石書店、2020年、pp. 9-20)の一部である(ただし、中略部分がある)。これを読んで、後の問いに答えなさい。

学校教育において、異文化理解教育、国際理解教育、多文化教育、多文化共生教育、グローバル教育といった教育が、国際化、グローバル化に呼応するように展開してきた。この30年、「外国人」に対する人びとの感覚は変容し、異文化接触場面で起こる排除や抵抗は減ったように見える。気軽に海外旅行や短期留学、海外ボランティアに出かける若者が増加し、高校の研修旅行で異文化体験をする事例も増えた。日本国内においても外国人観光客、留学生、外国人労働者などが増加し、交流の機会が増えた。教室内の多文化化が進み、外国につながる子どもとともに育つことも珍しくなくなった。教科書に掲載される写真や挿絵にも多様な人びとが意図的に配置されるようになった。国際結婚も増え混血の子どもが誕生し、「ハーフ」「ダブル」「ミックス」といった人の混交を表現する言葉も、差別的な意味ではなく、むしろ肯定的に表現されることも見られるようになった。

しかし、こうしたヒトの多様性が日本社会で現実として進行しつつも、個々人の感覚の中で「馴染んでいる」「受け入れられている」かどうかは別である。髪、肌、眼の色など、外見の風貌が日本人の「一般的」なものと異なる人を見たときに、「あ、外国人だ」と思わず「見てしまう」人は少なくないだろう。キャンパスでの様子を観察していると、アジア系の留学生とすれちがったり教室で同じ授業を履修したりしても、特に日本人学生のまなざしは変わらないが、アジア系以外と思われる留学生に対しては好奇の目を向けたり、座る席に距離感があったり、もしくは必要以上にフレンドリーな態度を示す学生がいる。これは外見の違いに起因するのだろうか。日本人の学生が髪の色を金髪に染め、カラーコンタクトで青い目にしたとしても、当然「外国人」扱いにはならない。どうも肌の色の違いによる認識は学生の態度に何らかの区分があるようだ。

先に述べたように、グローバル化の進展とともに多様な人びとを目にし、交流する体験は今や特別なものではなくなっている。しかし、外見の違いによる特別な認識はメディアにおいて顕著である。ファッション雑誌には、明らかに日本人ではなくアジア系でもない外国人や外国につながりがあると推測される「ハーフ」モデルが登場する。

芸能界と呼ばれるコミュニティには2015年ごろから一時期「ハーフ会」なるものが存在した。日本育ちの彼らは日本語を不自由なく話す。「ハーフ会」を組織する主な要素は「外見」のようだ。なぜならそこにアジア系の風貌のメンバーはいなかったからである。日本人のような内面をもちながら外国人の風貌をもつことが際立ち、それが芸能界での「ウリ」でもあった。彼ら自身が「ハーフ」として他者から区分されることへの「自己意識」があり、日本社会の中で生きにくさの中で「ハーフであること」の一種の連帯を見出したのだろう。これは外見で可視化される「ハーフ」と、アジア系同士の可視化しにくい「ハーフ」を区分することにもなった。日本人と中国人の親をもつ学生が「私もいわゆるハーフなんですけど、同級生からハーフじゃないと言われました。私は『日本と中国』なんです」と言った。つまり、肌の色などの風貌が「ハーフ」の要素として大きいことがわかる。(中略) 近年では「ハーフ」ではなく「ダブル」という表現によってポジティブな意味合いをもつ表現が普及しつつある。何れにしてもそこには「普通の日本人」とは差異化するまなざしが存在し、自他を区分する意識が発生している。

問い 最後の文で述べられている「『普通の日本人』とは差異化するまなざし」について、あなたはどのように考えるか、上の文章の内容を十分にふまえて、具体的かつ明快に論じなさい。